

# 浦賀文化

令和元年（2019年）7月1日

第58号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 浦賀の昔話

昔話とは、信仰やならわし、戒めなど、その土地の風土や歴史と共にその地域に深く根づいた文化であり、人々が歩んできた証でもあるのです。浦賀にもたくさんのお話があります。

今回は、浦賀地域に伝承する昔話を二題ご紹介します。一つは吉井の「安房口神社」に、二つ目は黒船が来航した当時、乗組員によってもたらされた石鹼にまつわる話です。いずれも堀越英男さんが編集した『横須賀むかし話』から引用しました。



安房口神社

安房口さま

「吉井の里の明神山には「安房口さま」が社となって祀られておる。

社と言っても社殿はなく、霊石そのものが「御神体」になっている古式の神社じゃ。

昔、安房の洲崎大明神に乙姫さまから献じられたという大きな石が二つあったそうじゃ。

して、村人たちと交友をもったり、村人たちも船に近付いて、結構恐れることもなく、役人の目を盗んでは付き合いが行なわれていたそうじゃ。

彼らは帰り際に、村人たちにお礼として、きれいな、とても良い香りのする物を置いていったそうじゃ。

ところが、貰って困ったのは村人たちじゃった。良い香りはするものの、何に使うものかさっぱりわからない。

皆で考えたあげく、「こんな良い香りがするものだから、さっさと、おいしい物にちがいない」という意見にまとまったそうじゃ。

さっそく隣近所の者を集めて、煮て食べてみようということになったんじゃ。ところが、煮始めると後から後から泡が浮き出て、一向に煮える気配がない。

勇気のある何人かがそれを食べてみたところ、みんな大変な下痢をしまして、村中が大騒ぎになったというんじゃ。

恐らく、村人たちが乗員から貰った物はシャボン（石鹼）だったんじゃろう。（以下略）

※嘉永六年（一八五三）、黒船が浦賀沖に来航した際、日本中が大騒動になりました。一方、

長崎で先端技術を学んできた中島三郎助ら浦賀奉行所の役人が活躍する場面にもなりました。そうした中で、黒船の乗組員と村人との交流もあったのでしよ

うか、珍しい物がもたらされたようです。泡の出る不思議な物体に、石鹼を見たことがなかった浦賀の人たちはさぞ驚いたことでしょう。

そして、好奇心旺盛な浦賀の人々と冷静な奉行所役人の対応により、大事に至ることなく、久里浜での国書交換の日を迎えるのでした。

◆ ◆ ◆

『横須賀むかし話』はしがきより

「私たちは、この横須賀に住みながら、この土地の歴史をほとんど知らない。私自身、この稿と向かい合ってみて「いかに我が町の記事来歴というものに無関心であったか思い知らされた」と言ってしまうでしょう。（中略）

この稿を読まれるに当たっては、当時の人達がかく信じ、かく生き、それに託した祖先の願いに、しばし心をいたし、「郷土的」な夢の一時を過ごしていただければ幸いです」



出典 横須賀むかし話 堀越 英男 編著

（芳賀久雄）



# 歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その八

郷土史家 山本 詔一



●目付・松平らの  
海防見分一件①●

弘化三年（一八四六年）、アメリカ東インド艦隊の司令官ビッドルに率いられた二隻の大型軍艦が浦賀に姿を現した。同年九月一八日、幕府は、目付松平式部少輔近韶をリーダーにした五〇名余りの一行を江戸湾周辺の海防見分をさせるために派遣した。一行が到着したのは夕刻になってからであった。

翌日、奉行所へ出向いた近韶を迎えた奉行・大久保因幡守忠豊は、与力の中島清司ら呼び会談を行った。

これより少し前に御小人目付の加瀬崎十郎が奉行所を訪れ、与力・中島清司と面談し、「天保一〇年（一八三九年）正月に、鳥居耀蔵と江川英龍が行った御備場見分の書類を焼失してしまったため、その時の動向がわからなくなりました。もし浦賀に控えがあったらその書き抜きを頂きたい。」と申し出た。中島は、早速調べて加瀬崎の元へ届けている。

中島らを加えた大久保奉行と近韶の会談の中で、見分のスケジュール作りを行なった。大久保は、まず房総半島まで一望できる灯明

堂の背後の山頂にある平根山台場と海沿いに築かれた最新の鶴崎台場を見分することを提案。もし房総半島が見えない場合は、船番所の武器庫や船の見分をし、浦賀の実情を見てもらうことから始めることとした。

九月二〇日はあいにくの天候であったので、武器庫を見分した。二日は晴天に恵まれたので、平根山と鶴崎台場を見分、この時、

与力の合原操蔵と近藤改蔵らは久里浜沖の海鹿島方向に向けて大筒を撃って見せている。翌二二日は、川越藩が警備する観音崎と走水の十石・旗山の台場見分のため、近韶の宿泊場所になっていた感応院（現・西叶神社）に近い紺屋町へ奉行所で用意した船を廻し、その船で鴨居まで移動した。

この見分で幕府役人の間でさまざまな疑問が湧いたのであるが、異国船渡来時の警備について、「異国船が渡来した時、どこまで入って来たら番船や改船を出すのか。」という質問があった。これに対し、「まず、番船と改船は同じものである。番船に使用している押送船に中筒と小筒を備え、船六艘を出す。一艘ごとに与力一名、同心四

名が乗り、一番船には通詞が乗ることになっている。天保一三年（一八四二年）の薪水給与令以降は、

房総の洲崎と城ヶ島を結ぶラインを「乗留め線」としたので、蕃船はその外まで乗り出し、まず異国船に、「退去せよ」と仏語で書かれたものを見せる。その後、異国船へ乗り移り、穏やかに来航の意図を聞き、そして浦賀沖まで来たら、沿岸警備を担当している川越藩と忍藩の船も加わり、ここより内海に入らないように警備をする。異国船との交渉は浦賀奉行所を中心に行うことになっている。」と答えた。この解答書を作成したのは中島清司、近藤改蔵、合原操蔵で、もちろん奉行が目を通して了解が得られてから、一行のもとに提示された。

## 俳句の散歩道

安房のぞむ浦賀城址の山桜 田島清一郎

リハビりに余年なき日花は葉に 新田 和江

## 特別展

【国宝】東寺の「空海と仏像曼荼羅」

## 笑話一題

日本に密教の教えを根付かせ、嵯峨天皇より東寺の整備を賜った空海。東寺の講堂や仏像の造営を通じて、真言宗の根本道場として基礎を築き、国家の安泰などを祈りました。『曼荼羅』とは、絵画や彫刻などを使って、仏の教えを图示した物です。中でも彫刻については、密教文化が持つ独特な雰囲気やその世界観を、絵画と比べより直観的に感じることが出来ます。

仏の教えを伝える『真言密教』。十五体の立体曼荼羅が表わす密教空間は、まるで真言密教という、広い宇宙空間の中に居るようでした。

（れなママ）



#分館でインスタばえ〜？#  
当館玄関に浦賀中学校美術部製作の顔出しパネルがあります。  
ぜひ、写真を撮りに来て下さい！

